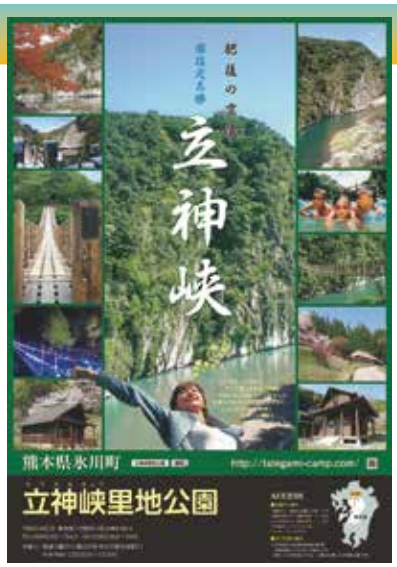
立神峡だより

立神峡のポスター完成

立神峡は県南の素晴らしい観光地でありますが、今までは宣伝のためのポスターがありませんでした。そこで、もっと多くの人に立神峡を知ってもらおうと企画し、立神峡の素晴らしい景観と四季折々の写真を織り交ぜたポスターを作成しました。ポスターの大きさはＡ１サイズでＡ３の４倍とかなり大きいものです。

また、チラシやパンフレットも併せて増刷し、公共施設などに配布するよう準備を進めています。ご希望される人は、是非、お問い合わせください。

皆さんで、もっともっと立神峡を宣伝しましょう。



▲立神峡のポスターが完成しました

里地屋敷がリニューアルしました

▲リニューアル前

◀リニューアルしてきれいになった里地屋敷

立神峡公園内にある「里地屋敷」は、昭和30年代をイメージした古民家風の建物で、大きな五右衛門風呂が人気の宿泊施設です。建設されてから長い間、風雨にさらされて外観がかなり傷んでいたので、今回シックな黒で塗装を施しました。「ログハウス信」の塗装に引き続き、里地屋敷も見事に新築当時の姿に甦り、宿泊客にもますます人気が出そうです。

秋には小学校６年生の宿泊通学体験授業も計画されており、きれいになった里地屋敷で子どもたちの歓声が里山に響き渡りそうです。

夏本番を迎えた立神峡

長かった梅雨もやっと明け夏本番が始まりました。ここ立神峡は、親子連れの観光客で連日賑わいを見せています。夏の暑さを避け川遊びするには、もってこいの場所が立神峡です。

しかし、昨年の熊本地震と連日の大雨により川底は日々変化しており十分な注意と準備が必要です。子どもを遊ばせるには、立神地区にある第一駐車場下が川底が浅く、安心して子どもたちと触れ合うことができるのでお勧めです。

▲安全に川遊びを楽しんでください

川遊びを計画しているなら是非、立神地区に来て夏の涼をお楽しみください。

【お問い合わせ先】立神峡公園管理棟
☎ 62-1543　FAX62-1546 (8:30～17:30 火曜定休日)

ホームページアドレス
http://tategami-camp.com

町民文芸

短歌

お風呂場の
プラの腰掛冷っとせぬ
ほど良き初夏となりにけるかな
北野津　宮本　末秋

待ち侘びし
屋根の修理を来週に
来ますとの由嬉しき便り
吉　本　髙橋　澄子

入道を映すすき間もない青田
炎天下にも風の涼やか
西野津　古崎スエノ

巡り来る
季節の連れしほおずきの
友の笑顔想い重なり
南鹿野　尾崎　京子

引き算の
美を知りてより我が庭は
端然として涼しげとなる
西上宮　村内　一誠

サクサクと
リズムよくキュウリ刻みゆく
幼き偲ぶ母の味
西野津　古崎　栄子

結界を越えて去りゆく母の影
ひたすら願う浄土の倖を
桜ヶ丘　宮﨑敬四郎

エアコンのフル回転の台所
古き我屋も電化おとずれ
上鹿島　前村　俊子

俳句

父の日や去年（こぞ）の日記に大吟醸
北野津　宮本　末秋

髪洗ひ一日（ひとひ）の疲れ癒へにけり
吉　本　髙橋　澄子

復興を祈る短冊笹だんご
西野津　古崎スエノ

梅雨晴れ間
のどこし清しところ天
南鹿野　尾崎　京子

冷蔵庫くらし支える夏深し
西野津　古崎　栄子

山門をくくりうじ神蝉時雨
町　香山菊童子

蜩（ひぐらし）のひときわ高く夕暮れる
町　香山セツ子

心太（ところてん）くるる嫗（おうな）や母の味
西上宮　村内　一誠

蝉すだく我（われ）天運にうながされ
桜ヶ丘　宮﨑敬四郎

余生なお一途に生きよ雲の峰
桜ヶ丘　吉田　照子

暴風（かぜ）去りて
ほっと安如（によ）の夕焼け雲
町　田中　澄子

生かされて今逢う倖や沙羅の花
桜ヶ丘　宮﨑トシ子

太陽の怒（いか）りのごとき陽ざしあり
上鹿島　前村　俊子

投稿いただきます作品は、短歌・俳句それぞれ一句とします。必要な場合は、ルビを付けてください。
また、確認のためお電話することもありますので、連絡先の記入をお願いします。

文芸Ⅱ（その1）

法道寺　本田　花風

悔悟というほどのものでなし・・・過ぎ去りし心象・・・このエッセーは、概ね三十年近くも過去の作品である・・・

「過悔」、読みはない。私にとって『過ぎ去りし日の悔種』を文字表現した言葉です。悔悟と言うほどの悟りの境地にはほど遠い、脳裏の片隅に何かの拍子に訪れ、そして一刻もせぬうちに現実にかき消えてしまう、と或る過去の悔みへの自意識表現とでも言えばよいのでしょうか。

それは、過去に埋没してしまった事実をいつか整理しなければと思う思惑とともに、そのことで自分自身を慈しみ、また他へ自己の思慮を知らしめようとする手段とに、大方の心配りが割かれていることを否定することのできない、詰まるところ自作自演の造語であり自己弁護の方法かもしれません。

悔悟というほどのものでなし、としたその話のひとつは・・・。二十代半葉のころといえば、今から三十年近くも遠い昔の今昔物語になります。当時は若さもありましたし、意地もそれなりにありました。

しかし、その気負いが災いしたのは、花形職務であった設計マンとして九州あちこちを巡って長期出張していた頃の事です。関門トンネルを通過する小倉から下関の同軸ケーブル設計の出張の際、大型マンホールの開閉に明け暮れて、夜は夜なよな痛い腰をさすりつつジャン卓三昧の明け暮れが祟ったのか、痛めた腰痛が遂には五分の成否を賭けるヘルニアの大手術を受ける羽目になってしまったのでした。